

夫それ法華經の第七神力品に云はく「要を以て之を言はゞ、如来の一切しよの所有うの法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す」等云云。釈に云はく「經中の要説、要は四事に在り」等云云。

問ふ、所説の要言の法とは何物ぞや。答ふ、夫それ釈尊初成道より、四味三教乃至法華經の広開三頭一の席を立ちて、略開近顯遠を説かせ給ひし涌出品まで秘せさせ給ひし処の、実相証得そのかみの当初修行し給ふ処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり。教主釈尊、此の秘法をば三世に隠れ無き普賢・文殊等にも譲り給はず。況んや其の以下をや。されば此の秘法を説かせ給ひし儀式は、四味三教並びに法華經の迹門十四品に異なりき。所居しよの土は寂光本有ほんぬの国土のうごなり。能居の教主は本有無作の三身しよけなり。所化以て同体なり。かゝるみぎり砌なれば久遠称揚の本眷属上行等の四菩薩を、寂光の大地の底よりはるばると召し出だして付嘱し給ふ。道暹律師云はく「法是久成どうせんりつしの法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云。

問ふ、其の所嘱の法門、仏の滅後に於ては何れの時に弘通し給ふべきや。答ふ、經の第七卷葉王品に云はく「後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむること無けん」等云云。謹んで經文を拝見し奉るに仏の滅後正像二千年過ぎて、第五の五百歳とうじょうけんご・闍諍堅固びやくほうおんもつ・白法隱没の時云云。

問ふ、夫諸仏の慈悲は天月の如し。機縁の水澄めば利生の影を普く万機の水に移し給ふべき処に、正像末の三時の中に末法に限ると説き給ふは、教主釈尊の慈悲に於て偏頗あるに似たり、如何。答ふ、諸仏の和光利物の月影は九法界やみの闇を照すと雖も、謗法一闍提ほうぼういつせんたいの濁水には影を移さず。正法一千年の機の前には唯小乗・権大乘相叶へり。像法一千年には法華經の迹門機感相応せり。末法の始めの五百年には法華經の本門前後十三品を置きて、只寿量の一品を弘通すべき時なり。機法相応せり。今此の本門寿量の一品は像法たの後の五百歳、機尚堪えず。況んや始めの五百年をや。何かに況んや正法の機は迹門すら尚日浅し、増して本門をや。末法に入つて爾前・迹門は全く出離生死しゆつりしよじの法にあらず。但専ら本門寿量の一品のみに限りて出離生死の要法なり。是を以て思ふに、諸仏の化導に於て全く偏頗無し等云云。

問ふ、仏の滅後正像末の三時に於て本化ほんげ・迹化しやつけの各々の付嘱分明なり。但寿量の一品に限つて末法濁悪の衆生の為なりといへる經文未だ分明ならず。慥かに經の現文を聞かんと欲す、如何。答ふ、汝強あながちに之を問ふ、聞いて後に堅く信を取るべきなり。所謂寿量品に云はく「是の好き良薬ろうやくを、今留めて此に在く、汝取つて服すべし。差えじと憂いふること勿なれ」等云云。

問ふ、寿量品は専ら末法悪世あくせに限る經文顯然けんねんなる上は私に難勢を加ふべからず。然り

と雖も三大秘法其の体如何。答ふ、予が己心の大事之に如かず。汝が志無二なれば少し之を言はん。寿量品に建立する所の本尊は、五百塵点の当初より以来、此土有縁深厚・本有無作三身の教主釈尊是なり。寿量品に云はく「如来秘密神通之力」等云云。疏の九に云はく「一身即三身なるを名づけて秘と為し、三身即一身なるを名づけて密と為す。又昔より説かざる所を名づけて秘と為し、唯仏のみ自ら知るを名づけて密と為す。仏三世に於て等しく三身有り、諸教の中に於て之を秘して伝へず」等云云。題目とは二意有り。所謂正像と末法となり。正法には天親菩薩・竜樹菩薩、題目を唱へさせ給ひしかども、自行計りにして唱へてきて止め。像法には南岳・天台等は南無妙法蓮華經と唱へ給ひて、自行の爲にして広く化他の爲に説かず。是理行の題目なり。末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり。名体宗用教の五重玄の五字なり。戒壇とは、王法佛法に冥じ、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて、有徳王・覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時、勅宣並びに御教書を申し下して、靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべき者か。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは是なり。三国並びに一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王・帝釈等の来下して踏み給ふべき戒壇なり。此の戒法立ちて後、延暦寺の戒壇は迹門の理戒なれば益あるまじき処に、叡山の座主始まつて第三・第四の慈覚・智証、存外に本師伝教・義真に背きて、理同事勝の狂言を本として、我が山の戒法をあなづり、戲論と謗ぜし故に、思ひの外に延暦寺の戒、清浄無染の中道の妙戒なりしが、徒に土泥となりぬる事云ひても余りあり、歎きても何かはせん。彼の摩黎山の瓦礫となり、梅檀林の荆棘となるにも過ぎたるなるべし。夫一代聖教の邪正偏円を弁へたらん学者の人をして、今の延暦寺の戒壇を踏ましむべきや。此の法門は理を案じて義をつまびらかにせよ。此の三大秘法は二千余年の当初、地涌千界の上首として、日蓮慥かに教主大覚世尊より口決せし相承なり。今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に介爾計りの相違なき、色も替はらぬ寿量品の事の三大事なり。

問ふ、一念三千の正しき証文如何。答ふ、次に申し出だすべし。此に於て二種有り。方便品に云はく「諸法実相所謂諸法如是相乃至欲令衆生開仏知見」等云云。底下の凡夫理性所具の一念三千か。寿量品に云はく「然我実成仏已来無量無辺」等云云。大覚世尊久遠実成の当初証得の一念三千なり。今日蓮が時に感じ此の法門広宣流布するなり。予年来己心に秘すと雖も此の法門を書き付けて留め置かずんば、門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加ふべし。其の後は何と悔ゆとも叶ふまじきと存する間貴辺に対し書き遺し候。一見の後は秘して他見有るべからず、口外も詮無し。法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給ひて候は、此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給へばなり。秘すべし秘すべし。

弘安五年卯月八日
大田金吾殿御返事

日蓮花押